キリストの光　光のキリスト

復活節第3主日　4月6日
（ルカ24・13―35）

イエスの復活を信じるということは、イエスが「今」生きておられることを信じることである。

「イエスは十字架につけられて殺されたが…」と説教を始めた時、前にいた幼稚園の年長児が大きな声で即座に言った。「生き返った！」。わたしは「復活して今も生きておられる」と続けるつもりでいたが、この子の言葉で一瞬説教が止まってしまった。ミサの参列者はにこにこしている…。「子どもとともにささげるミサ」でないときでも、子どもたちの反応はいい…。

「そうだね。でも、生き返って、今そのイエスさまが生きておられる、ということが大切なことなんだよ。今もここにおられるんだよ」。口調が子ども向けに変わってしまった。

いないけど、いる

自分自身を振り返ってみると、イエスの復活をイエスが神であることの証明のように思っていた。小さい時から…。イエスは神だから、何でもできる。すごいことができる。だから、死んだとしても生き返ることができる、と。復活の出来事と自分とのつながりがよく分からなかった。ただ「すごいこと」として信じていた。過去の出来事として…。神だから死んでも生き返ることができると信じることは難しいことではなかった。

イエスの復活の出来事として

は過去の一度のこと。しかし「主は復活して今も生きておられる」というメッセージに耳を傾ける時、復活の信仰とは、今生きておられる主を信じることだと気づかされる。今、生きておられる…そのように信じる時、主の復活の出来事と「わたし」がつながる。これこそ、わたしの救いのメッセージだと気づかされる。

女性たちや仲間の者たちはイエスの墓に行ったが、そこには遺体はなかった。そこで天使が告げる。「イエスは生きておられる」と。

「いないけど、いる」と信じることが復活を信じること。「見えないけど、見る」ということが復活を信じること。

エマオという村に向かっていた二人の弟子は、途中から一緒に歩いていた人がイエスだとは気づかなかった。二人の呼び掛けに応えてイエスは共に泊まるために家に入る。

「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった」（24・30―31）

いなくなった方がいることを信じ、姿は見えないがイエスが共にいてくださることを信じる。ミサのたびにこのイエスとの出会いを新たにしながら自分の復活への旅を続ける。

（山元眞＝福岡教区司祭／カット＝高崎紀子）

今週の福音

7日・月 ヨハネ 6・22―29
8日・火 ヨハネ 6・30―35
9日・水 ヨハネ 6・35―40
10日・木 ヨハネ 6・44―51
11日・金 ヨハネ 6・52―59
12日・土 ヨハネ 6・60―69